

# ジェンダー的視点から見たトランスローカルな禅仏教

——南山宗教文化研究所所蔵ルース・フラワー・佐々木資料から——

## Translocal Zen Buddhism from a Gender Perspective: Findings from the Ruth Fuller Sasaki Collection of the Nanzan Institute for Religion and Culture

守屋友江

Tomoe MORIYA

### Abstract

While most studies on modern Buddhism that traveled around the Pacific deal with male priests and lay practitioners, a critical mass of female Buddhists (including Buddhist sympathizers) crossed the Oceans. By utilizing the archival sources of the Nanzan Institute for Religion and Culture, this paper focuses on these women practitioners, particularly Ruth Fuller (Everett) Sasaki, and uncovers her translocal network that connected Buddhists on both sides of the Pacific. This paper also refers to the ongoing research of the Ruth Fuller Sasaki Collection of the NIRC, a part of collections originally from the Ryōsen-an in Daitokuji Temple in Kyoto. The Center for Buddhist Studies, University of Arizona, holds original drafts of Sasaki's translation of *The Record of Linji*, and other drafts and correspondences of Sasaki were moved to the University of Chicago Library before the NIRC acquired the rest of the papers. This project aims to eventually construct a network of archival information to uncover the whole picture of Ruth Fuller Sasaki's understanding of Buddhism and her agenda in the first half of the twentieth century.

1

日本と海外を往還した近代仏教に関する先行研究において、その主たるエージェントとして記述されるのは、男性の僧侶や在家信者である。筆者自身の研究でも、その傾向は否めない<sup>1)</sup>。そもそも、宗教を取り扱う研究にジェンダー的な偏りがあるという問題は、例えばすでに日本宗教学会の機関誌である『宗教研究』の特集（1989年「宗教と女性」と、その30年後の2019年「ジェンダーとセクシュアリティ」）において指摘された通りである<sup>2)</sup>。すなわち、研究対象および研究者自身のジェンダーとして圧倒的に男性が多く、女性の信者と研究者の存在や視点が、あたかも存在しなかった

かの如く語る研究が多い状況がある（本稿では紙幅の関係からこれ以上ふれないが、アメリカに関わる仏教研究である場合、エスニック的にヨーロッパ系の人物が研究対象であることが少なくないという一面もある<sup>3)</sup>）。こうした点から、川橋範子が述べたように、「ジェンダーの視座」、すなわち「宗教における女性の周縁化と不可視化に批判の目を開かせ、男性中心主義が生みだした解釈や価値観を疑う批判的視点」<sup>4)</sup>をもって史料を読み解くことが重要となる。

本稿は、そうした研究動向を踏まえて行われた、南山宗教文化研究所所蔵ルース・フラー・佐々木資料（以下、南山RFS資料）と、南山宗教文化研究所所蔵静坐社資料（以下、南山静坐社資料）の調査に基づく研究の成果である。とくにルース・フラー・佐々木というアメリカ人女性仏教徒による日米を跨いだ活動に着目することで、男性中心に語られてきた仏教史研究において、より幅広いジェンダー的視点を提示しようとする試みである。筆者の病氣と怪我のためアメリカでの調査に十分に取り組みなかったが、今後の課題として稿を改めて論じることとしたい。

また資料アーカイヴという観点からいうと、彼女が日本に残した資料は現在、大徳寺龍泉庵、アリゾナ大学仏教学研究センター、シカゴ大学図書館、南山宗教文化研究所の4カ所に分散して所蔵されている。そのため、これら全体を統合して捉え、資料全体の特色とその学術的意義を明らかにすることの意義についてもふれることとする。

## 2

ルース・フラー・佐々木（Ruth Fuller Sasaki, 1892～1967）<sup>5)</sup>は、アメリカ・イリノイ州シカゴで富裕層のフラー家に生まれた。彼女は1917年に弁護士で20歳年上のエドワード・W・エヴェレット（Edward Warren Everett, 1872～1940）と結婚し、翌年に娘のエレノア（Eleanor）をもうけた。エレノアは後に、1960年代アメリカにおけるカウンターカルチャーの代表的人物の一人となるアラン・ワッツ（Alan Watts, 1915～1973）と結婚する。

ルースはヨーロッパでピアノのレッスンを受けたり、何度もアジアへ長期旅行をしたりするなど、経済的にめぐまれた環境で育ち、「東洋」の宗教や文化に強い関心をもつようになる。正規の高等教育を受けなかったものの、1927年から2年間、シカゴ大学でサンスクリットとインド哲学の講義を聴講している<sup>6)</sup>。つまり独学で「東洋」の文化や仏教を学んだわけだが、それはアジアへのオリエンタリズム的な関心という同時代の思潮とも相俟っていたといえる。例えば、少し遡るとイングランド生まれの紀行作家イザベラ・バード（Isabella Lucy Bird, 1831～1904）が日本への旅行記『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrine of Nikkō*, 1879）を書いており、下つてはアイルランド生まれのリリー・アダムズ・ベック（Lily Adams Beck, 1862～1931）がアジアに関するファンタジー小説を著している。

アダムズ・ベックの小説『虹の香水』（*The Perfume of the Rainbow and Other Stories*, 1923）には、日本に関する作品のほか、彼女独自の神智学的な解釈からなる仏教<sup>7)</sup>を取り上げた作品が収録されており、また釈迦の生涯を取り上げた『アジアの光輝』*The Splendour of Asia: The Story and Teaching of the Buddha*, 1926) のような作品もある<sup>8)</sup>。彼女はまた最晩年を京都で過ごし、京都・八幡市の専門道場である円福寺に外国人向けに禅リトリートを行う「外人禅窟」を創設するように臨済宗の神月徹宗（1879～1937）に働きかけてもいる。円福寺の「外人禅窟」は、1930年代初頭にルー

スをはじめとする欧米から参禅を希望する外国人のために開かれ、当時大谷大学で教鞭を執っていた仏教思想家の鈴木大拙（1870～1966）と妻のビアトリス（Beatrice Lane Suzuki, 1878～1939）がサポートした<sup>9)</sup>。円福寺に「外人禅窟」が置かれたのはわずかな期間ではあったが、やがて二・二六事件や十五年戦争が始まるなど、軍国主義が席卷する前に欧米から仏教の修行をするために来日した女性たちがいて、「外人禅窟」において彼女たちを受け入れていたことは、これまで近代仏教史であり注目されてこなかった点である<sup>10)</sup>。

このような女性たちの「東洋」宗教への関心は、トマス・ツイードがヨーロッパ系アメリカ人仏教徒の仏教受容に関して提示した類型のうち、「秘教主義的」、「ロマン主義的」という二つのタイプが組み合わさった形が該当するといえるだろう。すなわち、オカルト的で神秘経験を重んじ、神智学やスピリチュアリズムなどに強い関心をもって、神智学を介して仏教に出会う「秘教主義的」な側面と、「異国情緒溢れる土地に魅了され」、アジアの芸術に関心をもつ都市部のエリート層が形成する「ロマン主義的」な側面である<sup>11)</sup>。ツイードの研究は1910年代までを分析の対象としているが、1930年代のアメリカで活躍した一般の仏教徒・仏教賛同者に関する末村正代と堀まどかの調査によるリストには、アダムズ・バックとルースが名を連ねている<sup>12)</sup>。全般的に富裕層の女性の多いことが明らかであることから、1910年代以降もツイードの類型に当てはまる女性たちが比較的多かったことがうかがえる。大恐慌にもかかわらず、ルースが何度も太平洋を渡って来日することができたのも、経済的な余裕があって渡航費用の支出に支障がなかったためであろう。

ルースは、鈴木大拙の紹介により南禅寺でも参禅する。「外人禅窟」を置いた円福寺はともかくとして、南禅寺側には外国人女性が参加することに戸惑いもあったようである。彼女は1932年から南禅寺の禅堂へ通っていたが、当時雲水であった三浦一舟（1903～1978）<sup>13)</sup>は、南針軒老師（河野霧海, 1863～1935）のもとでの厳しい修行や臘八接心にルースは耐えられないだろうと踏んでいたところ、「彼女は何の困難もなしに雲水と同じ熱心さで大接心を坐り抜いたと驚きを込めて述懐している<sup>14)</sup>。アメリカ人のルースが坐禅で足を組んでいられたのは、栗田英彦が指摘するように、鈴木夫妻の紹介で、小林信子（1886～1973）が1927年に設立した「静坐社」という修養団体にて坐り方を教わっていたからである<sup>15)</sup>。南山静坐社資料には、1930年代だけでなく1950年と1961年に小林に宛てたルースの書簡があり、戦前から戦後にかけて長く二人が交流していたことがうかがえる。

帰国後の1933年、ルースはニューヨークで「アメリカ仏教協会」（Buddhist Society of America）を主宰して禅を広めていた佐々木指月（1882～1945）と出会い、1938年に指月から法名「慧龍」を授かる。そしてアメリカ仏教協会のニューズレター『猫のあくび』（*Cat's Yawn*）の編集に携わり、ニューヨークへ居を移して指月の指導の下、本格的に禅を学ぶようになる。1940年に夫のエドワードを亡くした後は、アパート一棟を買い取り、同協会の禅堂と指月の住居として提供し、自分も別の階に居住している。

しかし、1941年12月7日の真珠湾攻撃によりアジア太平洋戦争が勃発すると、指月は「敵性外国人」とされ、1942年6月に逮捕されてエリス島の収容所へ収監されてしまう。いわばアメリカ仏教の「法難」であるが、日本人移民がほとんどおらず軍域でもない東海岸の都市に住む佐々木指月が逮捕されたのは、彼が「国家の脅威」とされた宗教、すなわち仏教の僧侶であったことが大きい<sup>16)</sup>。ルースとアメリカ仏教協会のメンバーは、囚われの身となり体調が芳しくない指月の解放に向けて奔走し、そして1943年8月、指月は仮釈放の形で解放された。その過程でルースは指月と——異人種間の結婚を禁じるアーカンソー州の州法に妨害されながらも——結婚する。つまりアメ

リカ人の伴侶をもつことで「国家の脅威」ではないことを示し、法的にルースをアメリカ仏教協会の後継者とすることができるようにしたのである。アメリカ仏教協会は1944年、指月の要望により「米国第一禅堂」(First Zen Institute of America)と名称変更している。だが収容中に崩した体調の回復は進まず、指月は1945年5月に亡くなる。ルースは指月の死後、米国第一禅堂の代表として活動する。そして1949年、まだ連合軍の占領下にあった京都へ渡り、「日米第一禅協会」(First Zen Institute of America in Japan)を大徳寺龍泉庵に設立する。

南山RFS資料からうかがえる戦後の京都におけるルースの活動は、まず日米の研究者チームによる禅籍の英訳プロジェクト、次に海外からの禅修行者の受入れ先としての異文化交流的活動、そしてニューヨークの米国第一禅堂やメンバーたちとのニューズレター(*Zen Notes*)を通じた宗教的ネットワークが挙げられる。とくに注目すべきは、ニューヨークの米国第一禅堂へ招聘する三浦一舟による公案の講義録をルースの名で英訳した*Zen Dust*や『臨濟録』など禅籍の英訳である。ここでは、禅籍の英訳プロジェクトについて南山RFS資料から明らかになった点を述べることにする。

これらの翻訳には、中国古典文学と中国禅の碩学・入矢義高(1910～1998)、中国禅宗史の専門家・横井(柳田)聖山(1922～2006)と、禅籍の翻訳で知られるフィリップ・ヤンポルスキー(Philip Yampolsky, 1920～1996)、中国文学と翻訳を専門とするバートン・ワトソン(Burton Watson, 1925～2017)らが招かれ、さらにまだ学生のゲイリー・スナイダー(Gary Snyder, 1930～)も加わった国際的なチームが携わった。タイプライターの草稿に入矢と柳田が説明を書き加えたメモのほか、ヤンポルスキーやワトソンと思われる翻訳メモが書かれたタイプ草稿から、彼らがチームとして禅籍の英訳を手がけていたことがうかがえる。入矢らにインタビューをした原マヤ氏によると、研究者である翻訳チームと専門的な学術的な訓練を受けず日本語も拙いルースとの間で、翻訳の進め方で大きな意見の相違があったという<sup>17)</sup>。その相違は、残念ながら日米第一禅協会の活動がルースの死後に引き継がれなかったことの遠因になったといえるだろう。とはいえ、翻訳チームのメンバーは各々、日本とアメリカで禅研究に多大な貢献をすることとなる。

### 3

上記の活動の詳細は、大徳寺龍泉庵に所蔵されていたルース・フラー・佐々木資料からうかがうことができる。しかし、この膨大な資料群の中の『臨濟録』翻訳原稿を除き、利用できる研究者がほとんどない状態が長く続いており、さらに大徳寺でこれらの資料を2020年に整理することとなった。そのうち和書と漢文経典は龍泉庵に残すことになったものの、それ以外の洋書、書簡、原稿、写真、ノート、カセットテープ、帳簿類などの保管先を探す必要が生じた。筆者は、JSPS 科研費基盤研究(B)20H01192による調査を行う中でこの資料群に遭遇し、その重要性から調査を行ってきたが、大徳寺芳春院住職のご承諾を得て、残った資料群を京都市の上七軒文庫に移管していただくこととした。その後、2022年に南山宗教文化研究所へ移管して現在に至る。

その後の調査で、資料全体は現在、次の4カ所に分散して所蔵されていることが明らかとなった。大徳寺龍泉庵、アリゾナ大学仏教学研究センター、シカゴ大学図書館、そして南山宗教文化研究所である。各所に所蔵されている図書及び資料の概要を表にまとめると次の通りになる。

表 ルース・フラー・佐々木資料所蔵先と資料一覧

所蔵先	所蔵資料
大徳寺龍泉庵	和書, 漢文經典
アリゾナ大学仏教学研究センター	『臨濟録』 翻訳原稿
シカゴ大学図書館 Hanna Holborn Gray Special Collections Research Center	洋書*, 書簡, 原稿等の資料
南山大学南山宗教文化研究所	洋書*, コロタイプ版經典, 資料 1,633 点

南山 RFS 資料の 1,633 点のリストは図書館流通センター、デジタル化の一部は D.I.M.S. 社の協力によりすでに作成済みだが、全てを掲載することは字数が多すぎるため、別の方法で公開する予定である。アスタリスクを付けた洋書は、大徳寺龍泉庵にあった図書目録に 1,811 冊が記載されていたが、現在はシカゴ大学図書館と南山宗教文化研究所に分かれて所蔵されている。南山宗教文化研究所所蔵分は、洋書とコロタイプ版經典を含めておそらく約 1,300 冊ではないかと推測される。シカゴ大学への移管にあたってはジェームズ・ケテラー氏が資料と図書を選定してシカゴへ運んだということだが、現時点でケテラー氏と連絡が取れないため詳細は不明である。

最後に、ルースが戦後日本で取り組んだ、日米第一禅協会での多彩な活動の意義をあらためて振り返って攷筆することとしたい。禅籍の英訳プロジェクトや、海外からの禅修行者受入れといった活動は、禅を学ぶための出版物として結実する一方、専門道場での身体的な実践を通して学ぶ機会を提供した。約 1,800 冊の蔵書は、日米第一禅協会の図書室で閲覧・貸出をしており、その種類は仏教だけでなく他の宗教、歴史、文化、言語を学ぶ手助けとなる本が数多くあった。1930 年代には在家信者として禅を学ぶ、受け手側であったルースが、1940 年代には豊富な遺産を元手にニューヨークのアパート一棟を買い取って米国第一禅堂を運営し、戦争を経て 1950 年代になると大徳寺内に龍泉庵と日米第一禅協会を設けて禅籍の翻訳や禅修行者の仏教理解を促すという、禅文化を発信する側になっていく過程からは、女性仏教徒の主体的な歩みを見ることが出来る。もちろんその歩みには躓きもあったが、資料をひもとくことでさらに明らかになることが多いと思われる。そしてとりわけ、そのような総体的な仏教理解を目指したルースの計画は、文字通り四散した資料群全体を見渡すことで、初めて明らかになるといえるだろう。

## 謝辞

本研究に関わる調査にあたっては、安藤礼二氏、原マヤ氏、末木文美士氏、師茂樹氏、亀山隆彦氏からご教示をいただきました。

## 付記

本稿は、2023 年度パツへ研究奨励金 I-A-2 「南山宗教文化研究所所蔵ルース・F・佐々木資料の

国際アーカイヴ構築に関する基礎研究」および JSPS 科研費基盤研究 (B) 20H01192 「禅から Zen へ—世界宗教会議を通じた禅のグローバル化の宗教史・文化史的研究」による研究成果です。

## 注

- 1) 例えば拙稿 “D.T. Suzuki at the World Congress of Faiths in 1936: An Analysis of His Presentation at the Interfaith Conference,” *Journal of Religion in Japan* 10, nos. 2-3 (2021): 135-160, doi: <https://doi.org/10.1163/22118349-01002001>; 「アメリカ禅の成立」『国際禅研究』8号, 2022年, pp. 229-240.
- 2) 井桁碧 「性の位階——フェミニズム的視覚からの宗教研究のための序」『宗教研究』63巻1輯, 1989年, pp. 1-23. および『宗教研究』93巻2輯, 2019年所収の特集論文 (猪瀬優理 「新宗教におけるジェンダー——信仰体験談と生命主義的救済観」, 川橋範子 「ジェンダー論的転回が明らかにする日本宗教学の諸問題——ウルスラ・キングとモーニィ・ジョイを中心に」, 小林奈央子 「民俗宗教研究におけるジェンダー視点の必要性——女性行者を中心に」, 小松加代子 「スピリチュアリティを求めて——ジェンダーの視点から」, 田中雅一 「セクシュアリティ・ジェンダー体制とその宗教的攪乱——デーヴァダーシーと子宮委員長はるをめぐって」, 出村みや子 「教父の聖書解釈におけるジェンダー理解——創世記一六章の解釈を手掛かりにして」, 堀江有里 「キリスト教における「家族主義」——キアア神学からの批判的考察」, 嶺崎寛子 「イスラームとジェンダーをめぐるアポリアの先へ」) を参照。
- 3) Sharon A. Suh, “Women in Asian/Asian North American Religion: Whose Asian/Asian North America, Whose Religion?” *Journal of Feminist Studies of Religion*, vol. 30, no. 1 (Spring 2015), pp. 137-139; 川橋範子 「宗教研究とジェンダー研究の交錯点」川橋範子・小松加代子編 『宗教とジェンダーのポリティクス——フェミニスト人類学のまなざし』昭和堂, 2016年, pp. 7-11.
- 4) 川橋範子 「宗教研究とジェンダー研究の交錯点」, pp. 4-5.
- 5) ルースの姓は Fuller, 1940年に夫と死別するまで Fuller Everett. 戦時中の1944年以降 Fuller Sasaki と変わるが, Fuller Sasaki が最も知られているため, 本稿ではルース・フラー・佐々木 Ruth Fuller Sasaki として記すこととする。
- 6) Isabel Stirling, *Zen Pioneer: The Life and Works of Ruth Fuller Sasaki*, Berkeley: Shoemaker, 2006, pp. 3-10.
- 7) 欧米における仏教受容に与えたオリエンタリズムと神智学の影響については, 増澤知子 (秋山淑子・中村圭志訳) 『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説』みすず書房, 2015年 (Tomoko Masuzawa, *The Invention of World Religions: Or, How European Universalism was Preserved in the Language of Pluralism*, University of Chicago Press, 2005); 拙稿 “D.T. Suzuki at the World Congress of Faiths in 1936,” pp. 1-160; 吉永進一 『神智学と仏教』法蔵館, 2021年; 吉永進一・岡本佳子・莊千慧編 『神智学とアジア—西からきた〈東洋〉』青弓社, 2022年を参照。
- 8) タイトルから推測できるように, アダムズ・ベックはエドウィン・アーノルドの『アジアの光』(*The Light of Asia*) を念頭に釈迦の生涯を著したと序文で述べている。L. Adams Beck, “Preface” to *The Splendour of Asia: The Story and Teaching of the Buddha*, New York: Dodd, Mead, 1926, pp. 1-2.
- 9) 栗田英彦 「国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料——解説と目録」『日本研究』47号, 2013年, pp. 247-248; 末村正代 「千崎如幻の後半生と欧米人來日禪修行——円福寺 Zen Hospice の設立と三宝教団修行ルートの確立」『南山宗教文化研究所報』33号, 2023年, pp. 71-79.
- 10) 栗田英彦 「南山宗教文化研究所所蔵静坐社資料——解説と目録」『南山宗教文化研究所研究所報』27号, 2017年, pp. 24-27. また, 栗田 「国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料」; 末村 「千崎如幻の後半生と欧米人來日禪修行」; 拙稿 「アメリカ禅の成立」を参照。
- 11) トマス・ツイード (鳥津恵正訳) 「秘教主義者, 合理主義者, ロマン主義者——欧米仏教徒の類型」末木文美彦ほか編 『ブッダの変貌——交錯する近代仏教』法蔵館, 2014年, pp. 179-213 (Thomas A. Tweed, *American Encounter with Buddhism, 1844-1912: Victorian Culture and the Limits of Dissent*, Bloomington: Indiana University Press, 1992, pp. 48-77).
- 12) 末村正代・堀まどか 「二〇世紀前半期の米国における仏教者リスト——一九三〇年代の日本人開教史による記録か

- ら」『近代仏教』29号, 2022年, pp. 136-147.
- 13) 彼はのちに東京・八王子市の専門道場である廣園寺住職を経て, 戦後, ルースの招聘によりニューヨークで禅の伝道に努める。
- 14) 三浦一舟「渡米の因縁」丹羽慈祥編『覧古遺芳』丹羽慈祥, 1981年, pp. 49-51.
- 15) 栗田「国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料」, pp. 247-248.
- 16) Duncan Ryūken Williams, *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War*, Cambridge: Harvard University Press, 2019, pp. 27-38, 55-84.
- 17) 原マヤ氏とのインタビュー。南山宗教文化研究所にて, 2023年5月30日。Stirling, *Zen Pioneer* にはその点が曖昧に記述されているが, 原氏は入矢らに直接インタビューをしており実証性が高い。